

(創作音楽劇)

## 命を捨てて ～滝廉太郎の生涯～

Music play "Lay down one's life ～The life of TAKI Rentaro～"

狩谷 新

### 1 資料室

うすぐらい書庫のような部屋

メイド姿のマレーネが、パッドを手に机に向かい膨大な書類と格闘している。

ノックの音。

マレーネ「書類に目を落としたまま」どうぞ！」

廉太郎が恐る恐る入ってくる。

廉太郎「資料室はこちらですか？」

マレーネ「そうだけど、あなた、まさかガブリエルに言われてきた人？」

廉太郎「名前はわからないんですが」

マレーネ「髪、こういう風にひつつめて、「私ってきれい！」って感じで、微笑みなんかたたえちゃってる感じの大柄な女？」

廉太郎「そうです。そうです。マリア様みたいな」

マレーネ「まったく！気楽でいいわよね。ニコッて笑って、後はこっちへ丸投げなんだから」

廉太郎「お忙しいようでしたら、僕は後でも」

マレーネ「待つてるって、言っても行くところないでしょ」

廉太郎「何しろ初めてのところですから、なんか勝手がわからなくて。そもそもここはどこなんでしょう？」

マレーネ「知りたい？」

廉太郎「気がついたら列に並んで、暗いんだか、明るいんだかもよく判らないし」

マレーネ「ここは、選別本部特殊課第24資料室、で私は室長のマレーネ、室長って言っても部下は今、来月教皇が来るってんで

借り出されて、いないけどね」

廉太郎「なんか軍隊みたいですね」

マレーネ「似たようなもんよ。あなた日本人？」

廉太郎「はい」

マレーネ「西郷頼母？」

廉太郎「会津のですか？」

マレーネ「そうそう。戊辰戦争で奥さんや娘さんを立派に切腹させたのに、本人は結構長生きしてた」

廉太郎「でも函館でも戦ったし、最後まで松平容保様に仕えた忠君の侍ですよ」

マレーネ「自分で言うかな」

廉太郎「言ってます。僕は西郷じゃないし」

マレーネ「確かに70過ぎの爺さんには見えないわね。判った藤村操だ」

廉太郎「旧生一高の学生で父親は北海道の銀行の頭取、エリート中のエリートなのに、人生を儚んで華嚴の滝に飛び込んだ」

マレーネ「そうそう、後追いする学生が180人も出ちゃって、

こっちは大変だったんだから、責任とってよ」

廉太郎「無理です。大体僕は、藤村操じゃありませんから」

マレーネ「それにしちゃ詳しいわよね」

廉太郎「新聞だけは毎日読んでましたから」

マレーネ「病気だったの?」

廉太郎「肺結核です」

マレーネ「あっ!」

廉太郎「どうしました?」

マレーネ「ちょっと待ってね。(あちこち書類を捜し回りながら) 来ると思ってたのよ。あなたほら、ガブリエルの好みだから、若いし、いくつだった?」

廉太郎「誕生日まだですから、23です」

マレーネ「8月24日だっけ」

廉太郎「そうです。明治12年、西暦で言うと1879年」

マレーネ「一ヶ月も前から準備してたのに、(廉太郎を振り向き)

ぼーっと立ってるなら手伝いなさい!」

廉太郎「はい。でも何を探せば…」

マレーネ「あなたのファイル!赤い字で書いてあるから、瀧廉太郎って!」

廉太郎「漢字ですか?」

マレーネ「アルファベットでも書いてあるわ。TAKI RENTARO」

て、あった!これだわ!」

暗転

タイトル 「命を捨てて 瀧廉太郎の生涯」

2 メーソン邸 音楽室 1878年

ピアノを弾きながら伊沢修二(27歳)の歌唱指導をするメーソン(60歳)

伊沢「歌っている」

メーソン「だめだめだめえ!のどを使つてはいけません」

立ち上がり、伊沢の腰の部分を後ろから押して

メーソン「おへその下あたり、ここから、空気を送り込んで、音程

は頭で、ブレインでコントロールします。のどではない!の

どだと、(やってみせる)、ブレインの指示に従えば(やってみ

せる)。分かりましたか?」

伊沢「イエッサー!」

伊沢歌い始める。

下手にマレーネと廉太郎。

廉太郎「あの人は?」

マレーネ「伊沢修二さん」

廉太郎「初代校長の?」

マレーネ「そう、いずれ東京音楽学校初代校長の伊沢さん、で、教

えてるのが、メーソン先生」

廉太郎「メーソン先生って、日本に最初にピアノを持ってきたか

だった、あの?」

マレーネ「さすがに詳しいわね。でもメーソン先生が日本にくるのは、もうちょっと後、今、伊沢さんがいるのは、マサチュー

セッツ州ボストン」

廉太郎「えっ、ボストン!去年大分市にオープンしたばかりのホル

トホール大分じゃなくて?」

マレーネ「はあ?あなたねえ、始まったばかりで、まぜつかえさな

いでくれる」

廉太郎「すみません。新しいホールなんで、知名度あげようかなっ

て」

マレーネ「それどころじゃないでしょ。あなたがなんでこんなに早

く、こつちへ来たかつて話をしようとしてるのに」

廉太郎「すみません。もうしませんから。ボストンってことは、アメリカですね」

マレーネ「そう。伊沢さんは、1875年から3年間、ブリッジウォーター師範学校、先生になるための学校ね。そこに通ってたの」

廉太郎「僕が生まれる前ですね」

マレーネ「そう。伊沢さんは、とても成績良かったんだけど、唱歌、声楽ね。これが苦手だったみたい」

廉太郎「それでメーソン先生に」

マレーネ「師範学校の校長先生は、母国語が違うから、免除してあげるって言うてくれたんだけど、それを断って特訓」

伊沢「(フォスターの夢追い人)を朗々と歌う」

廉太郎「上手じゃないですか」

マレーネ「頑張り屋さんなんだね。これがきっかけで、翌年、帰国して文部省音楽取調掛の掛長になった伊沢さんは、メーソン先生を招くことになるの」

幸田延(小学生)が入ってくる。

メーソン「延さん。これはなんという音かな？(ピアノのソを弾く)」

幸田「ソです!」

メーソン「じゃあこれは?」

幸田「ミです」

メーソン「では、これは?」

幸田「和音ですね。ドミソです」

メーソン「では、これは?」

幸田「ドファラ!」

廉太郎「あの子は?」

マレーネ「幸田延さん」

廉太郎「延先生!ちっちゃいなあ」

マレーネ「まだ11歳だからね。延さんは1870年生まれだから、あなたの9歳上」

廉太郎「えっ!あれ、ここボストンじゃないんですか?」

マレーネ「東京のお茶の水、年は1882年、師範学校付属小学校よ。メーソン先生は、日本に初めて和音教育をもたらしたって言われてるのよ。」

廉太郎「時間も空間も飛んじゃってるんだ」

マレーネ「その辺はこつちに置いて、この頃、あなたは、1月に生まれた妹のスエさん、二人のお姉さんと一緒に東京に住んでたわ」

廉太郎「覚えてないなあ」

マレーネ「まだ三歳よ。覚えてるわけじゃないでしょ。だから、私がこうやって説明してるんじゃない」

廉太郎「僕が物心つく前に、延先生は、音楽の世界にいたんだ」

マレーネ「それも伊沢先生が、1879年に音楽取調掛を立ち上げてたから」

廉太郎「僕が生まれた年に」

マレーネ「あなたが生まれたのが8月24日、同じ年の10月に日本  
の音楽教育が本格的にスタートしたの」

廉太郎「音楽取調掛って、僕の学校の…」

マレーネ「そうよ、東京音楽学校、後の東京芸術大学の前身。先生  
も用意してたのよ。1871年に、津田梅子さん、大山捨松さ  
んと一緒に当時10歳だった瓜生繁子さんが、ワシントンで音  
楽の勉強を始めてるわ」

廉太郎「延先生の恩師だ」

マレーネ「そう、10年後に帰国して、ピアノ科の教授になつて  
る」

廉太郎「二十歳で？」

マレーネ「校長の伊沢先生もまだ20代よ。外国からお招きした先  
生たちはお爺さんだったけど、日本人は、皆若かったの。延先  
生は満13歳で、伝習生として入学してる」

廉太郎「僕が4歳の時だ」

### 3 思い出

スクリーンに当時の横浜

廉太郎「あれ、この景色、見覚えある」

マレーネ「あなたたちは、お父様が神奈川県少書記官、今で言う副  
知事になられて、11月に横浜に引っ越してる」

廉太郎「姉さんがヴァイオリンを習ってた」

スポットライトに小さな順が照らされて「キラキラ星」を弾く。

マレーネ「幕末から、横浜は文化的に日本で一番進んでいたところ

なの。とにかく西洋のものならなんでも取り入れようとしてい  
た頃だし、この頃のお父様には金銭的余裕もあったからね。ア  
コーディオンもあったでしょ？」

廉太郎「ありましたありました！でも僕には大きすぎて」

マレーネ「そもそも瀧家、あなたのおうちね、その瀧家は、日出藩  
の家老まで務めた武士の家系でしょ。あなたもかなり鍛えられ  
たんじゃない？」

廉太郎「そうですけど、この頃はまだ小さいから」

マレーネ「そうね。でも、この時期に、ヴァイオリンの音色を直に  
聞いてた子供はこの国には殆どいなかったのよ」

廉太郎「とても柔らかい音だった」

マレーネ「日本には弓を使う弦楽器はなかったの。琴も三味線も弾  
いて音を出してたからね。そんな横浜であなたは小学校に入学  
する」

小さな袴をはいて学帽を被った廉太郎登場。

廉太郎「ピカピカの一年生だ。でも確かすぐに転校したんですよ  
ね」

マレーネ「理由はよくわからないんだけど、お父様が突然富山に  
左遷されちゃったのよね」

廉太郎「左遷！だったんですか？」

マレーネ「転勤の直前に降格人事が発令されてるしね。勿論当時の  
廉太郎君には知る由もないわね」

廉太郎「遠かったことは覚えてます」

マレーネ「飛行機も北陸新幹線もなかったからね。高崎まで汽車で

行って、中山道、旧道の方ね。そこを北へ上って、軽井沢から北国街道に入って、小諸から上田を回って北陸道ってルートにしても、船で四日市まで行って、北上するにしても、5歳の子供にはたいへんな道のりよね」

廉太郎「富山のことは覚えてます。転校した学校はお城の中にあっただんです。父の勤める県庁も同じ場所にありました」

マレーネ「ここであなたは特技を身につけるのよね」

廉太郎少年が表れて、器用に独奏を回して遊び始める。

廉太郎「はい！音楽と違ってこつちには、父も何も言いませんでした」

マレーネ「あなたが転校した翌年、1887年10月、音楽取調掛は、東京音楽学校になるの」

廉太郎「僕が遊びまわってた頃ですね。立山連邦の雄大さは今でもはつきりと覚えています」

マレーネ「でもその翌年、お父様は突然職を解かれてしまう」

廉太郎「それで、東京に戻ったんだ」

マレーネ「9歳といっても、まだ理解できなかったでしょうね。ここでまた転校」

廉太郎「休職って、どういう状態なんですか？」

マレーネ「次の任地が決まるまで、待機っていいのかなしら」

廉太郎「お金はどうなったんですか？」

マレーネ「明治政府は常に金欠状態だったから、当然無給」

廉太郎「でもそんなに困った感じじゃなかったなあ。7月には二人目の妹も生まれたし」

マレーネ「抜かりはなかったのよ。貯えがあったでしょうし、小さな子供が困るような生活にはなかったの」

廉太郎「立派な人だったんだ」

マレーネ「あなたは、麹町小学校尋常科三年に転入したのよね」

廉太郎「三回目です」

マレーネ「そのちよつと前に改革があつて、尋常科と高等科がそれぞれ一年延長されて4年になったの。卒業まで6年から8年になったわけ」

廉太郎「それで僕は東京に残されたんだ」

マレーネ「そうね。翌年お父様は、生まれ故郷の大分の群長に任命されるんだけど、あなたは、おばあ様と体の弱かった一番上のお姉さんと三人で、東京暮らし」

大きなトランクを持った幸田延登場。

廉太郎「あれ延先生だ。どこかへ？」

マレーネ「日本で始めての音楽留学生として、アメリカへ旅立つところよ」

廉太郎「どれくらい？」

マレーネ「アメリカで一年、その後ウイーンへ5年」

汽笛に送られ幸田退場。

廉太郎「延先生もこの年に家族と離れたんだ」

マレーネ「二十歳は過ぎてたけどね」

若い廉太郎が出てきて、泣き始める。後ろから抱きかかえる姉のリエ。

マレーネ「どうしたの?」  
廉太郎「おばあ様が亡くなったんだ。人の死を始めてみた」

4 スクリーンに夏はっぱの写真。マレーネ二人を押しつけてセーターに出て(以下の4のシーンは上演年度に合わせてその年の話題をアレンジするものとする)

マレーネ「夏はっぱあ! なして死んじゃったあ。病気も、地震も、大津波にも負けなかったに、たかが老衰で…83なんて、日野原先生に比べりゃ、子供みたいなもんさ。種市先輩との花嫁姿…見てほしがった」

廉太郎「ちよつと待って。僕男だし、おばあさん名前違うし」

マレーネ「判りやすい表現でしょ。今年死んじゃったら一番インパクトのあったばあちゃんなんだから」

廉太郎「そうかもしれませんけど」

マレーネ「悲しかったんでしょ!」

廉太郎「はい」

マレーネ「時に厳しく、時にやさしく、いきなり海に落とされたのもいい思い出…」

廉太郎「海には…」

マレーネ「まだ文句ある!」

廉太郎「わかりました。表現の自由ってことで」

マレーネ「でも83歳って、結構大往生じゃない」

廉太郎「でも姉さんは違う。まだ21だった」

慰めていたリエが、手を振りながら去っていく。  
じつと見つめている廉太郎少年。

スクリーンにユイちゃんの写真。マレーネ、廉太郎を押しつけてセーター。

マレーネ「ユイちゃん! おらまだ信じられね。宮藤官九郎、どこまで残酷なんや。『ユイちゃん本当に帰ってくるつもりだったのか、それとも東京で暮らす覚悟だったのか。それは誰にもわかりません』って、このナレーションで、一体どれだけの国民が8月最後の週末を不安にオノノキながら過ごしたか…。それをあつさり乗り越えておいて、今更病気で殺すなんて、クドカシ、あんたは鬼だ! 悪魔だ! ルシファーだ!」

何か言いたそうな廉太郎を見て、

マレーネ「文句あるの!」

廉太郎「僕の悲しみをわかり易く…」

マレーネ「そうよ」

廉太郎「それはいいんですが…」

マレーネ「何!」

廉太郎「怒りの予先がちよつと…」

マレーネ「BSで7時30分、地上波で8時15分、11時にBS、午後0時45分に地上波、これを全部見逃した人は夜11時にBS。その全国3千万の視聴者の怒りを代弁した私に文句があるっていうの」

廉太郎「わかりました」

マレーネ「じゃ、続けましょう。21歳のお姉さんの死は衝撃だったのよね」

廉太郎「姉さんが死んだ時、僕は十分にいたんだ。姉さんはたった

一人で旅立った」

マレーネ「尋常科を卒業する前におばあ様が、高等科に入学した直後にお姉さまがなくなったのね」

廉太郎「卒業も入学も祝ってもらおうような状況じゃなかった」

マレーネ「でも八月にはまた妹さんが」

廉太郎「トミが生まれた時は嬉しかったなあ。家の中がいっぺんに明るくなった」

## 5 一家揃つての食事風景

マレーネ「でもその翌年の暮れにはまた引越し」

廉太郎「竹田へ行ったんだ」

馬車に揺られて移動する一家。

マレーネ「1891年12月、6年前に完成した県道を揺られて、

野津原、温見を通つて竹田の家に着いたのは夕暮れだったわよね」

スクリーンに竹田の家が映る。

廉太郎「そうこの家だ！裏の洞穴に馬がいたんだ。懐かしいなあ」

マレーネ「高等科二年の途中でまた転校。友達とは仲良くやれたの？」

廉太郎「それは平気だった。僕には秘密兵器があったからね」

中国独楽のパフォーマンス

廉太郎「確かに独楽回しとカルタでは誰にも負けなかったけど、今

の僕、小学生なのに大きすぎませんか？独楽も違うし」

マレーネ「小さい頃に見た建物が、大人になってから見ると小さく見えることあるでしょ」

廉太郎「それはありますけど」

マレーネ「今のは、その逆の表現」

廉太郎「でも僕のは日本の独楽で中国独楽じゃ…」

マレーネ「演出でしょ。インパクトを狙った。派手な方がいいじゃない！」

廉太郎「はい」

マレーネ「そういえばこんなこともあったのよね。夏の夜、子供たちだけで肝だめし」

## 6 竹田 夜

4人の子供が集まっている。

六 「廉太郎は採ってくるかな」

一太 「無理無理！途中で戻ってくるさ。平助と同じだ」

平助 「だって真つ暗で怖いし、お城の石段思ったよりたけえし」

一太 「おめえ石段までも行つてねえだろ」

平助 「いったさあ、石段までは」

六 「途中までじゃどこまででもおんなじだ。ちゃんと天辺の漆喰もってこねえと」

一太 「でも今まで、もってけえつたのは治助だけやん」

治助 「独楽回しや羽根突きとは違うかな」

一太 「度胸つてやつか？」

治助 「そんだ！男は度胸、女は愛嬌つてな！廉太郎には愛嬌はあつ

「でも度胸はねえ」

平助「それにしても遅くねえか？」

一太「どっかで震えてんのかな」

六「見に行くか」

平助「おら、いかなぞ！死んでも行かん。治助が行けばいいんや」

六「そだな。ここは度胸のある治助に行ってもらわんと」

治助「いや肝試しは一回でええ。二回はいいかん」

六「別にそんな決まりはなかる。二度でも三度でも試さええ」

治助「二度目は怖くなかけん。意味ないやろ」

平助「別に肝を試すんやなかる。廉太郎、探しに行くだけやん」

治助「だったら平助でもええやんか」

平助「おらはもう暗いのは御免だ。度胸なんかいらん。愛嬌で生き

てく」

廉太郎「（さりげなく輪に入って）はははっ！愛嬌だけあっても平

助じゃ女子にはなれん」

六「そりやそうだ。平助が振りまく愛嬌のほうがこええって、廉

太郎！いつけえってきた」

廉太郎「どっかで震えてんのかな、つてとこだ」

一太「そんな前から！」

治助「それで、漆喰は？」

廉太郎「持ってきたよ。ほら」

石垣の一部を取り出す。

治助「こりやおめえ石垣のかけらじゃねえか」

廉太郎「そうだな。結構大事な部分かもしれん」

平助「そんなこつして、崩れたらどうすんじや」

廉太郎「俺の名が残るな」

一太「天下の岡城を最後に壊した極悪人」

廉太郎「独楽回しの廉太郎！」

見栄を切る。一同大笑い。

マレーネ「結構人気者だったんだ」

廉太郎「転校も5回目でしたから……。でもあの頃の連中とはずっと

仲が良かった」

マレーネ「13歳。その多感な年頃にあなたは一人の英雄と出会っ

た」

廉太郎「広瀬少尉だ。7月に一週間帰省したんです」

マレーネ「全国的には日露戦争で有名になるんだけど、地元では当

時から英雄ね。こんな感じかしら」

7 オスカルの衣装で登場する広瀬少尉。子供たちが群がる。

六「少尉さんは、船に乗って遠くまで行くんか」

広瀬「そうだね。インドを回って、スエズ運河を通り、トルコのイ

スタンブルまで行ったな」

廉太郎「和歌山の沖で遭難したエルトゥールル号の生存者を送り届

けたんですよね」

広瀬「よく知ってるな。おかげで向こうでは大歓迎された」

廉太郎「それまであまり交渉のなかったトルコと日本が、この事件

をきっかけに親交を深めたんですよ」

広瀬「そうだ。日本人が、礼節をわきまえた立派な民族だと認めら

れたんだ」

治助「少尉様、日本はこれから戦争するの？」

広瀬「そうだな。遭難した船から人を助けるだけじゃ、強い国とは



認められんからな」

平助「それに戦争がなけりや軍人さんは仕事がなくなっちゃう」

広瀬「それじゃ困る。でも、戦争になれば大勢の人が犠牲になる。

できれば避けたいところだ」

平助「それじゃ体なまっちゃうな」

広瀬「それも困るがな。はははっ」

廉太郎「ちょっと派手すぎませんか？」

マレーネ「美丈夫ってこと。何しろ軍神として、神社に祭られるんだから」

廉太郎「確かに魅力的な人だったけど…。僕とは違ってた」

マレーネ「でもお父様は、少尉を目指せて」

廉太郎「侍の家系だからね。姉さんたちには許してたけど、僕が

ヴァイオリンを弾くのは、嫌がってた」

マレーネ「そんな時、あなたの通っていた直入郡高等小学校に師範

学校を出たばかりの青年が赴任する」

廉太郎「後藤先生だ！」

## 8 後藤現れて、ピアノを演奏する。

マレーネ「後藤先生は、その頃竹田に一台しかなかったオルガンを

使って、あなたの音楽の世界を大きく開いたのよね」

廉太郎「今のピアノだったけど…」

マレーネ「今時、オルガンなんてないのよ。鍵盤楽器に変わらない

でしょ。運べなかったんだから、我慢する！」

廉太郎「確かにオルガンは貴重品で、渡辺先生以外は触ってもいけ

なかった」

マレーネ「でもあなたには許してた」

廉太郎「ヴァイオリンを弾いてたからかな。スケールが鍵盤に変

わっただけだったから」

マレーネ「そのうち式典の時はあなたがそのオルガンを弾くように

なってた」

蛍の光

## 9 瀧家 書斎

対峙している大吉と吉弘。

大吉「叔父上、いえ家督を譲っていただいた身として、あえて父上

とお呼びします」

吉弘「大吉、なんだ改まって」

大吉「父上の武を重んじる家訓は、この大吉が全うします。軍人で

はありませんが、建築、という分野で瀧家の名を残すこともで

きると思います」

吉弘「浅草の十二階も手伝ったそうだな」

大吉「設計はイギリス人でしたが、監督としての使命は果たせまし

た」

吉弘「廉太郎のことか…」

大吉「そうです。廉太郎は、音楽の道に進みたいと申しております

す」

吉弘「あんなに目が悪くて、できるものか」

大吉「めがねをかければ楽譜は読めますが、戦では役に立ちませ

ん」

吉弘「しかし、女子供でもできるようなことを」

大吉「モーツアルトもベートーヴェンも列記とした男性です」

吉弘「しかし、お前が勧めとる音楽学校も師範学校の付属になりさがつとるじゃないか」

大吉「でもなくなつとるわけではありません。国も音楽教育の重要性は十分認識しております。戦費調達のため、縮小されましたが、志は面々と…」

吉弘「廉太郎に何ができる？」

大吉「廉太郎には、父上と同じ血が流れております。たとえ分野が違つても瀧家の名を残す男にきつとなります。いえ私がならして見せます」

吉弘「大吉…。一緒に育つたお前の方が、廉太郎のことは詳しいのかもしれない」

大吉「そうかもしれません。どうか願いをかなえてやってください」

吉弘「・・・」

マレーネ「大吉さんは、確かあなたの従兄弟よね」

廉太郎「ええ、でも早くにご両親を失くされて、父が引き取つてましたから、僕にとつては兄さんです」

マレーネ「あなたより17歳も上だから、おじさんみたいなものね」

廉太郎「東京で建築士として働いていましたから、僕の東京行きもスムーズにいったんだと思います」

マレーネ「瀧家の正嫡な嫡子でもあったのよね」

マレーネ「父の兄の息子ですから」  
廉太郎「大吉さんが立派に瀧の家を継いでいたから、あなたが音楽の道に進めた、ともいえるわね」

廉太郎「そうだと思います。それに父は、少し絶望していたのかも知らない」

マレーネ「ご自分に？」

廉太郎「ええ。富山に飛ばされて以来、自らの業績が決して正當に評価されていたわけではありませんから…」

マレーネ「どうしてそう思うの？」

一人机に向かっている父吉弘。

廉太郎「背中です。一人で机に向かっている時、父の背中が寂しうだった」

マレーネ「しっかり仕事を果たしていたのに、いつも報われてはいなかった」

廉太郎「それも大吉兄さんの影響かもしれません。兄さんが仕上げた凌雲閣、浅草の十二階のことを繰り返し話してました」

吉弘「建築家は幸せだな。自分の仕事をはっきりとした形に残すことができる。始めたことを最後まで全うできる」

廉太郎「音楽家になれないなら、僕は役者になります！」

吉弘「…。与えられた仕事を真摯に全うしていれば、誰かが必ず見ていてくれる」

廉太郎「ひっそりと讀えられるだけでは…」

吉弘「はつきり認められたのか」  
廉太郎「…。僕は音楽に励まされました。遠い国のどこかで、ずっと昔に作られたメロディに心を癒されたんです。僕も誰かの役

に立ちたい」

吉弘「簡単なことではないぞ」

廉太郎「覚悟はあります」

吉弘「やってみるか」

廉太郎「ありがとうございます！」

暗転

10 瀧大吉宅 1894年8月

机に向かってしている廉太郎。大吉が入ってくる。

大吉「遅くまで頑張ってるな」

廉太郎「小山先生のおかげで、歌の試験は万全ですが、筆記がありますから」

大吉「算術の試験もあるそうだな」

廉太郎「英語に国語、作文もあります」

大吉「音楽としては歌うだけか」

廉太郎「僕は高等小学校を出ただけですから、他の科目で点を取らないといけないんです」

大吉「師範学校や中学を出ていれば、歌うだけか」

廉太郎「そうです。でも15で受けられるんですから」

大吉「受ければ最年少か。それも辛いんじゃないか」

廉太郎「転校には慣れてますから」

大吉「その頃俺は朝鮮だな」

廉太郎「軍のお仕事ですね」

大吉「清との戦争が始まったからな」

廉太郎「連戦連勝じゃありませんか」

大吉「大きな国だが、アヘン戦争で相当痛めつけられてるからな。

こっちはその教訓を活かしたおかげで、勝ち進んでる」

廉太郎「小山先生も軍歌の作曲でお忙しいようです」

大吉「敵は幾万ありとてもつてやつか」

廉太郎「軍歌だけではありませんけど」

大吉「広瀬君も従軍したようだ」

廉太郎「立派な方でした」

大吉「会ったことがあるのか」

廉太郎「竹田で一度だけ」

大吉「それはよかった。お前は恵まれてる。戦費調達で高等師範の付属になったとはいえ、音楽学校も存続してるしな。小山先生の指導を受けられるのも今だからこそだ」

廉太郎「兄さんもありますし」

大吉「そう思うなら、立派な音楽家になってくれ」

廉太郎「頑張ります」

暗転

マレーネ「それで合格したわけね」

廉太郎「おかげさまで」

マレーネ「9月に始まったのよね」

廉太郎「高等小学校を卒業したのが4月30日、高等師範学校付属東京音楽学校予科に仮入学したのが9月、12月に無事本入学しました」

マレーネ「変則的なのね」

廉太郎「小学校や中学は1892年から4月入学になったんですが、高校や大学の入学はずっと9月でした」

マレーネ「なんでも西洋式だったからね。むしろ4月入学の方が画期的だったんだ」

廉太郎「でもそのおかげで受験勉強もじつくりできたし」

マレーネ「その甲斐あって、二学期までは、殆どトップの成績。やるじゃん」

廉太郎「自分で選んだ道ですから」

マレーネ「それは感心！しかし、瀧廉太郎君、チミは三学期の試験を欠席しとるじゃないか。しかも二回とも」

廉太郎「それは、体調が…」

マレーネ「記録によると、脚気にかかっとなるな」

廉太郎「はい。療養のために竹田へ行きました。当時は重い病でしたから」

マレーネ「結核について死亡率の高い病気だったようだね。しかも原因不明」

廉太郎「海軍の軍人さんが大分やられてました」

マレーネ「白米を主食とすることで不足するビタミンB1が原因だとわかるのは、1920年代だからねえ。伝染病説もあったくらいだから。竹田へは一人で رفتんだ」

廉太郎「その頃、父は大分で引退してましたし、まだ小さな妹や弟がいて」

マレーネ「でも、結構楽しくやってたみたいじゃない」

廉太郎「友達もいましたし、後藤先生にもご挨拶できました」

11 竹田寺町 蛭子家旅館 1895年8月

文机に向かっている廉太郎の所へ、野田と佐久間が尋ねてくる。

野田「なんだまた母上に手紙か？」

佐久間「(手紙を取り上げ)毎日必ず通じありて、腹具合よく、三度の食もおいしく御座候。むろんそのおいしいのにまかせ、大食をいたさぬようつつしみおり候。佐久間は毎日きまして私の話し相手となります。俺のことまで書いてるのか」

野田「佐久間は暇だしな」

佐久間「俺の本業は京都だ。だから、こっちにいる間は高等遊民」

廉太郎「佐久間は田能村直入(たのむらちよくにゅう)先生についてるんだ」

野田「南画の勉強だろ。廉太郎の方がうまかったのにな」

廉太郎「僕のは戯れ絵だ。この窓から見える夏雲の壮麗さを描くことはできない。ただ青いだけの空に絶妙なアクセントをつける様をね」

野田「こいつ詩人みたいなことをいいやがる」

廉太郎「竹田の空は広い。この空を見ているだけで、病気が消えていくようだ」

佐久間「大分顔色もよくなったしな」

野田「毎日見てるお前が言うなら、確かだ」

廉太郎「そりゃあ心強い」

三人笑う。

野田「学校のほうは大丈夫なのか？」

廉太郎「小山先生が口添えしてくれて、どうやら進級できそうだ」

佐久間「お前に才能があるからだろう」

野田「人に認められてこそ、だからな」

日本画と西洋音楽。同級生二人が芸術家か。岡城の殿様もさぞ喜んでるじゃろう」

廉太郎「この景色が僕らを育ててくれたのさ」

暗転

廉太郎「その秋、延先生が6年の留学から帰って来られた」

## 12 東京音楽学校 奏楽堂

幸田延がスポットライトに浮かびあがる。

シューベルト「死と乙女」を朗々と歌い上げる。

(乙女)

ああ 遠くへ 遠くへ行って

野蠻な死神よ

わたしはまだ若いの だからおまえは行って

わたしに触れないで！

(死)

美しく繊細な創造物であるおまえよ 手を出し

わたしはおまえの友であって 罰するために来たのではない

機嫌をお直し！ わたしは乱暴ではない

わたしの腕のなかで穏やかにねむりなさい

廉太郎「先生は輝いてた」

マレーネ「この時、延先生は、ブラームスの『五月の夜』も歌って、メンデルスゾーンのヴァイオリン協奏曲を独奏、ハイドンの弦楽四重奏も披露してる」

廉太郎「糸おす指頭に満身の熱をたたえて、自らその霊音に心奪われしかと思われ、言い知らぬ細かき離れ業の自在なる実に何の語を以て表すべきかを知らず」

マレーネ「五月に出た文学界の評価ね。要するに上手だったことでしょ」

廉太郎「思わず見とれてしまいました。延先生には、独唱と和声学も教わったし」

マレーネ「そういえば、音楽学校は男女共学だったんでしょ。どうなのよ、そっちの方は？」

廉太郎「確かに女学生は同じキャンパスにいましたけど、男生徒と女生徒との間に於いては校の内外何れの場所を問わず文書の往復談話等をなすべからざる！ですから」

マレーネ「確かに生徒心得にはそう書いてあるけど、蛇の道は蛇っていうじゃない。延先生の妹、幸田幸さんとも親しかったんでしょ」

廉太郎「幸先輩は2年上で、一緒にテニスもしました…」

## 13 東京音楽学校テニスコート 1897年秋

袴姿にラケットを持った延と幸登場。

延「こんな格好じゃ瀧君に太刀打ちできないわ」

幸「あーら、格好のせいだけじゃないと思いますけど」

延「スカートさえ履ければ、あんな自己流テニス、打ちのめして差し上げるわ」

幸「確かに自己流かもしれないけど、本場仕込みのお姉さまでも、あのサーブにはお手上げじゃない」

延「そんなことおっしゃるならいつでも抜けてあげるわよ」

幸「それは駄目よ。お姉さまが監督してくださるってことで、男子と一緒にプレイできるんだから。それに私たち相手じゃ力不足でしょ」

延「それはそうだけど。節度は守らなくちゃ」

幸「廉太郎君は、二つも後輩で、最年少入学だからまだ十代よ。いつも鈴木君と二人でお汁粉ばかり食べてるし、家に来てても音楽の話ばかり」

延「確かに熱心な勉強家だわ」

幸「お姉さまも最近伴奏は廉太郎君ご指名じゃない」

延「ピアノは上手なもの。でも彼は演奏家向きじゃない」

幸「どうして？」

延「作曲家に対して、純粹すぎるのかもしれない」

幸「作った人を理解するのは良いことでしょ」

延「それはそうだけど、演奏者は楽譜を通じて作曲家と対話しなくちゃいけないの。唯、従うだけじゃ駄目。別の人格として向き合わなくちゃいけない」

幸「瀧君は違うの？」

延「彼の作品を見た？」

幸「日本男児と春の海でしょ。私は由比さんが作詞した春の海の方が好きだったけど」

延「日本男子は軍歌の影響が強い習作に過ぎないけど、春の海は違う。たった二曲でこの差が出るのは普通じゃないわ。彼は作曲家を目指すべきなのよ」

春の海が聞こえ始める

和歌の浦の 春のあさけ 八重の汐路  
風もなきて 寄する波の 花もかすむ

マレーネ「延先生は判ってみたいじゃない」

廉太郎「命をすて、ますらをが たてし勲功（いさを）は 天地（あめつち）のあるべきかぎり 語りつぎ いひつぎゆかん 後（のち）の世に妻子（つまこ）にわかれ 親をおき 君が みためと 尽したる そのいさをこそ 山桜 後の世かけて なほかたれ 親兄弟の 名をさへに かゝやかしたる ますらを は この世にあらぬ 後もなほ 国のしづめと なりぬべし」

マレーネ「散歩」の後の四作目が「命を捨てて」ってハムレットか！」

廉太郎「あの頃僕は、演奏家として評価されることに違和感があったんです。最初は褒められたけど、ケーベル先生に出会ってから、貶されるようになって…」

マレーネ「ヴァイオリンの幸田幸、ピアノの瀧廉太郎って音楽学校を代表する二大若手演奏家って言われてた頃ね」

廉太郎「器械的熟練の如何に大なるものありとするも、音楽における論理上の思想に発達することなくんば、決して音楽家にあ

らず」僕は先生に少しでも近づこうとしてた」

マレーネ「それで形から入ったのね」

廉太郎「音を体で表現しようと思ったんです」

ベートーヴェン ヴァリエーション ピアノ独奏

マレーネ「先輩名人を学ぶことは勿論結構なことなれども、先輩とても完全なるものならねば、そのよきところを学びて、悪しき所を捨てざるべからず。まして悪しきところのみをとりて真似るは論外なり」って讀賣新聞も言いたい放題だね」

廉太郎「先生の演奏に敵わなかったのは事実です」

マレーネ「でも聞く方だってそこまで耳が肥えてたわけじゃないんだから」

廉太郎「音楽を楽しむのに技術なんていりません。延先生の言うとおり、僕は演奏家ではなかったんだ」

マレーネ「だから、幸さんが二人目の音楽留学生になった時も…」

14 東京音楽学校 1899年 6月

一人でピアノの椅子に座っている廉太郎。入ってくる延。

延「瀧君、ご推察の通り、8割がた決定していたあなたのウィーン留学を止めたのは この私よ」

廉太郎「！」

延「でも、それは決して幸が私の妹だからじゃありません」

廉太郎「僕はそんなこと思ってもいません」

延「じゃあ何故だか判ってる？」

廉太郎「それは…」

延「この4月によく念願の独立を果たしたこの音楽学校からの初めての留学生よ。みんなの期待がどんなに大きいか、あなたにわかる？」

廉太郎「自覚はありました」

延「いいえ、私の見る限り、あなたには迷いがあった」

廉太郎「迷い？」

延「私の時もそうだったけれど、向こうで学んだことを全て還元するのが使命。二度目となればその目的も精鋭化される」

廉太郎「音楽全般ではなくて、役割が限定されるってことですか」

延「そうよ。幸の専門はヴァイオリン。その後身を育てるための教育を受けることが目的」

廉太郎「僕はピアノを」

延「確かにあなたのピアノの腕は、今日本一だと思う。演奏態度なんか関係ない。そうでなければこの私が伴奏を頼むはずないでしょ」

廉太郎「それなら何故？」

延「あなた本当にピアノの教師になりたいの！あなた以上のピアノリストを自分の手で育てたいと本当に思ってる？」

廉太郎「！」

延「今あなたを留学させれば、その道しか示されない。勿論色んな勉強はできるでしょう。でも帰ってきたら、ピアノを教えることだけが仕事になるの」

廉太郎「演奏家としても役割があるんじゃない」

延「勿論よ。でも私を見れば判るでしょ。講義は休みなしだけど、演奏会なんて数える程。今、この国で必要とされているのは、より多くの音楽家を養成するための教師なの。正直言って、こ

の国には世界的な演奏家を育てる余裕はないの」

廉太郎「でもこのまま日本に残っても、結局は同じじゃありませんか？」

延「このままじゃ駄目。でもあなたには別の道がある」

廉太郎「別の道……」

延「ケーベル先生がおっしゃってたわ。廉太郎は作曲家を目指すべきだって」

廉太郎「作曲？でもまだほとんど何も書いてません」

延「だから、今回は幸に譲って、作品を作って欲しいの。軍歌とは違う、私たちの日本語のための曲を！」

廉太郎「僕にそんなことが……」

延「できなくてもやるの。そうしなければたとえ誰が推薦しても、この私があなたの留学を絶対に認めない」

廉太郎「！」

暗転

マレーネ「まさに鬼教師ね」

廉太郎「でももし、あの時留学していたら、延先生の言った通り、僕は唯のピアノ教師にしかならなかったと思います」

マレーネ「あの時もそう思ったの」

廉太郎「演奏家としての将来に疑問があったのは事実です」

マレーネ「延先生は褒めてたじゃない」

廉太郎「伴奏には自信がありました。先生の言い方を借りれば、ソリストと作曲家の対話を助けるのは得意だったんです」

マレーネ「一人では話せなかったの？」

廉太郎「曲を書いた人間に近づこうとしていたんだと思います」

マレーネ「それは「話す」のとは、違うわね」

廉太郎「僕も評論家の方たちの書かれたことが正しいとは思いませんが、形から入ろうとしていたのは事実です。ケーベル先生の演奏方法をまねることで、先生の解釈を理解しようとしていましたから」

マレーネ「延先生は、あなたの中にあったあなた自身の表現力を見出したのね」

廉太郎「幸さんを留学させれば、身びいきだと非難されるのを覚悟の上で、僕を止めてくれたんだと思います。それに、くめ先輩の後押しもありましたから」

マレーネ「結婚して由比さんから東さんになつたくめさんね。それで、本格的に作曲に取り組み始めたんだ」

廉太郎「はい」

15 東京音楽学校 11月

ピアノの前で作曲に取り組んでいる廉太郎。その横で、詩を整理している鈴木毅一。そこへ、東くめと中村秋香が入ってくる。

東「秋の歌詞ができないんですって？」

鈴木「挨拶もなしですか？」

東「時は金なり、日進月歩の世の中で、ごきげんよう？今日はどちらへ？なんて挨拶は、女学生に任せときゃいいの。こっちは日本の音楽を変えようっていうんだからね」

鈴木「相変わらずだなあ、くめ先輩は。日本の四季を四人で書いてって主旨ですか」

東「春が、帝大の武島君、夏が私で、冬は秋香、後一人くらいその



辺にいますでしょ」

中村「詩人はいるかもしれないけど、歌にするとなるとね」

鈴木「さすが中村先輩はわかってらっしゃる。そのへんがこの鈴木毅のごとき凡夫にはできないところだ」

東「あなたに才能がないのは百も承知よ。でも人の良さで友達多いんですよ。その人脈を活かしなさいって言ってるの。巖谷さんにも聞いてみた？」

鈴木「ついこの間も、童謡の件で廉太郎と一緒に自宅に伺って、相談してみたんですが」

中村「島崎君が残ってればね」

東「音楽に見切りをつけた奴なんかほっときなさい。あれ、これは？（一枚の紙を取り上げる）」

鈴木「それは廉太郎がヒントになればって」

東「月ごとに 月の光はかわらねど あはれ身にしむ 秋の夜の月 誰の歌？」

廉太郎「タエさんです」

東「あなたの親代わりの従兄だけとお兄さんのように育った人の、奥様、だけど、元々親戚ってヒト？」

廉太郎「ややこしいことよく覚えてますね」

東「ややこしいから忘れないのよ。廉太郎、これあなた歌詞にしなさい」

廉太郎「強引だなあ」

東「月を たよりに 賤のめ（しずのめ）が さらす 細布（たえぬの） まきかえし うつや きぬたの ねにつれて うたう 鄙歌（ひなうた） あわれなり」

廉太郎「やめてくださいよ」

東「尾花かれふす 冬の野べ あさる鳥さへ いつかうせ 露に宿かる 三日月に 風もみにしむ 暮の鐘」

廉太郎「恥ずかしいからやめてくださいよ」

中村「廉太郎君が一年の時の歌詞ね」

鈴木「よく覚えてるなあ」

東「こんな暗い歌、私には無理だって思ったから覚えてるの」

鈴木「覚え方がひねくれてませんか？」

東、きつとにらむ。

鈴木「すみません！」

東「これだけ書けたんだから、あなたに任せる。秋は廉太郎が責任もって、書くこと！いいわね。私と秋香は、童謡の歌詞を進めてるから。しつかり頼んだわよ！」

二人風のように去っていく。

廉太郎「まったく嵐のような人だなあ」

鈴木「もういくつ寝ると お正月 ですからね」

廉太郎「鳩ぼつぼ 鳩ぼつぼ ポッポポッポと飛んで来い」

鈴木「お寺の屋根から 下りて来い」

廉太郎「雪やこんこん あられやこんこん」

鈴木「もつとふれふれ とけずにつもれ まんまじゃないっすか」

廉太郎「それが難しんだよ。詩を書こうとすると、僕らはどうしても言葉飾ろうとしてしまうだろ」

鈴木「そりゃそうだろ。言葉の芸術なんだから」

廉太郎「夏草や つわものどもが 夢のあと」

鈴木「芭蕉だな」

廉太郎「春は、あけぼの。やうやう白くなりゆく山ぎわ、少し明りて、紫だちたる雲の、細くたなびきたる」

鈴木「清少納言か。夏は、夜。月の頃は、さらなり。闇もなほ。螢の多く飛び違ひたる、また、ただ一つ二つなど、ほのかにうち光りて行くも、をかし。雨など降るも、をかし」

廉太郎「難しい言葉なんか一つもない。八百年も経っているのに、すっかり僕らの心に響いてくる」

鈴木「大和言葉か。でも最近はいぶおかしなことになってるぞ。ヒューマンライツを人権とか、フリーダムを自由とか言ってるし」

廉太郎「慌てて訳してるからな。でもフィロソフィーが哲学ってのはいいじゃないか。芝居をやってる連中に聞いたんだが、英語は勿論、台詞に漢語が入っても、テンポがくるうらしい」

鈴木「漢語もだめなのか」

廉太郎「危険だ！というより「危ない！」だろ」

鈴木「なるほどな」

廉太郎「秋は、夕暮。夕日のさして、山の端いと近うなりたるに、鳥の、寝どころへ行くとて、三つ四つ、二つ三つなど、飛び急ぐさへ、あはれなり。まいて、雁などの列ねたるが、いと小さく見ゆるは、いとをかし。日入り果てて、風の音、虫の音など、はたいふべきにあらず。確かに僕は秋にあってるな」

マレーネ「東さんとあなたの鳩ぽっぽと雪やこんこんは、今皆知ってるのとは詩が違うのね」

廉太郎「曲も違いますよ！僕らの幼稚園唱歌で、たぶん皆さんが知ってるのは、尋常小学校唱歌。よく歌われてるものの正式な題名は「鳩」と「雪」なんです」

マレーネ「紛らわしいわね」

廉太郎「すみません」

マレーネ「とにかく、この四季が完成したのは翌年の八月。ずいぶんかかったわね」

廉太郎「それだけやってたわけじゃありませんから」

マレーネ「完成前に留学も決まってたでしょ」

廉太郎「三月に推薦されて…」

16 音楽学校 キャンパス 1900年5月

上手に向かって譜面を読みながら歩く廉太郎。その前に現れる延。

延「滝君」

廉太郎「延先生。どうしたんですこんなどころで」

延「散歩に出たって聞いたから、先回りして待ってたの」

廉太郎「！」

延「決まったのよ。ライプツイッヒ。メンデルスゾーンが作った王立音楽院で三年間」

廉太郎「ドイツですか」

延「そう！研究目的は作曲とピアノの指導法！」

廉太郎「作曲…」

延「そうよ。いい、帰ってからのことなんか考えなくていいから。表現者としてのあなたの、あなた自身の才能を伸ばすことが目的！そうでなければ私の真意が伝わらない。分かっているわね」

廉太郎「はい！」

花 ピアノ演奏

マレーネ「でも九月になって突然、延期願いを出してるわね」

廉太郎「メヌエットも書きかけでしたし、くめ先輩との童謡集も未完成で、中学唱歌の募集もあったし」

マレーネ「ピアノも教えてたしね」

廉太郎「はい。音楽学校は教師が足りなくて、僕が抜けると困るみたいで」

マレーネ「それだけ？」

廉太郎「それだけです」

マレーネ「一九〇〇年よね」

廉太郎「そうですけど」

マレーネ「九月には新入生が入ってきたでしょ」

廉太郎「新学期ですから」

マレーネ「その中にはあなたの担当する学生もいた」

廉太郎「そうですけど」

マレーネ「港区の芝から自転車を通ってきた子がいるでしょ。柴田環さんっていったかしら」

廉太郎「！」

17 上野公園 1900年10月

袴姿で自転車に乗って現れる柴田環（16歳）

前を歩く廉太郎に追いつくと、自転車を止める。

環「滝先生」

廉太郎「柴田、クン」

環「先生もこれから授業ですか？」

廉太郎「そうだけど。君は確か」

環「先生のピアノは3時限めです。その前は、講義ばかり」

廉太郎「こ、講義も、た、大切だよ」

環「私は実技の方が好きです。先生私がどうして自転車で通ってるか知ってます？」

廉太郎「さ、さあ、わからないけど」

環「父の陰謀なんです」

廉太郎「い、陰謀？」

環「毎日自転車で通わせれば、その内、恥ずかしくなって、学校をやめるだろうって」

廉太郎「そ、そうなんだ」

環「でも、私はやめません。音楽の勉強は楽しいし、先生もとても優しいから」

廉太郎「やさしいって」

環「先生、熱があるの？」

廉太郎「いや、そんなことは」

環「顔が真っ赤ですよ。気を付けてくださいね。あつこのままじゃ遅刻しちゃう。それじゃ、後で！」

自転車走り去る環。残される廉太郎。

マレーネ「先生、顔が真っ赤ですよ」

廉太郎「よ、よしてくださいよ」

マレーネ「何しろ、芝から上野まで、自転車美人を見ようと野次馬が出たほどのお嬢さんでしたからね」

廉太郎「環君は、確かにきれいだったけど」

マレーネ「まっ、先生も21歳。同級生はみんな年上のおねえさんばかりでしたからね」

廉太郎「だからって、環君が原因で留学を延期したわけじゃ」

マレーネ「それはわかってますけど、延期を申請したのが、9月28日ですからねえ。新学期が始まって一か月。環ちゃんを意識するには十分じゃありませんこと？」

廉太郎「嫌いだっただけじゃないけど…」

マレーネ「やっぱり好きだった」

廉太郎「か、可愛かった、そうとても熱心で、可愛かったんだ」

マレーネ「お嫁さんにしたいくらい」

廉太郎「それは、冗談でそんなこと言ったかもしれないけど」

マレーネ「女性を見る目は確かだったようね」

廉太郎「からかわないでください」

マレーネ「からかわってないわ。環さんはあなたのお嫁さんにこそならなかったけれど、ブッチーニ自ら称賛するような世界的オペラ歌手三浦環になったんだから」

蝶々夫人アリア 独唱

ある晴れた日、海の彼方にひとすじの煙が上がるのが見えるでしょう。

やがて船が姿を見せます。

その真っ白い船は港に入り、礼砲を轟かせます。見える？ あ

の人がいらしたわ！

でも私は迎えには行かないわ。行かないの。あそこの丘の端に立って待つわ、長い時間。

長い時間待つともなんともないわ。すると・・・人々の群れから離れ小さな点のように見えるひとりの人が 丘に向かって来るわ。

誰でしょう、誰かしら。 どんなふうにして着いたのかしら。

なんと言うでしょう。なんて言うかしら。遠くから「蝶々さん」

と呼ぶでしょう。

でも私は返事をしないで、隠れているわ。それはちょっとはいたずらでもあるし、

久しぶりに会うので喜びに死んでしまわないためでもあるのよ。

それであの人は少しばかり心を傷めて呼ぶでしょう。呼ぶわ。

「かわいい妻よ、美女桜の香りよ」

これはあの人が来た時私につけてくれた名前なの。

(スズキに)

すっかりこのとおりになるのよ、約束するわ。 あなたは心配し

ていればいいわ。

私はかたく信じて、あの人を待ってます。

マレーネ「淡き初恋に敗れた廉太郎は洗礼を受けた」

廉太郎「入信したのは、環君とは関係ありません」

マレーネ「冗談よ。でもそんなに否定されるとかえって疑っちゃう

けど」

廉太郎「中世以来、西洋音楽の発展はキリスト教との結び付きを抜きにしては語ることができないほど密接な関係を有していた。

西洋音楽を深く理解し、その本質に迫るためには、キリスト教と直接関わることも必要になってくる。ドイツ留学を半年後に控えた瀧がクリスチャンになったことは、必然的な結果である

と言えようって、松本正先生も書いておられるじゃないですか」

マレーネ「ちよつと何読んでるのよ」

廉太郎「大分県先哲業書 安永武一郎監修、松本正著 滝廉太郎」

マレーネ「人のアンチヨコ、勝手に読むんじゃないよ！」

廉太郎「安永先生って、芸短の学長も務められた方ですよ」

マレーネ「そうだけど、あなたが知ってるのは変でしょ!」

廉太郎「マレーネさんだけに説明させるの、悪いかなって思っ」

マレーネ「余計な事はしないでよろしい。大体このマレーネ様が、

この資料を手に入れるのにどれだけ苦労したか!」

廉太郎「すみませんでした。これからは役割に気をつけます」

マレーネ「ええっと!ピアノ曲は完成したの?」

廉太郎「メヌエットですね。はい、完成しました」

マレーネ「じゃあちよつと聞いてみましょう」

ピアノ独奏 メヌエット

マレーネ「この曲と前後して、中学唱歌も作曲してるわね」

廉太郎「音楽学校が独立した時から企画されてた唱歌集で二〇〇曲

以上載ってるんですが、その中の 38曲の作曲だけ公募した

んです。一人三作までって制限付きで」

マレーネ「それであなたが選んだのが?」

廉太郎「荒城の月、箱根八里、それに豊太閤の三つです」

マレーネ「三曲とも入賞したのよね」

廉太郎「嬉しかったなあ」

マレーネ「賞金も貰ったのよね」

廉太郎「受賞一作で5円、三曲で15円いただきました」

マレーネ「小学校の先生の初任給より、多いじゃない」

廉太郎「学校からピアノの補助指導で月に10円もらってましたか

ら、本当の副収入です」

マレーネ「無駄使いしなかったでしょうね」

廉太郎「大分の母に丸髷の型を送って、妹たちには簪、タエさんに

盥を買って、後はみんなで汁粉を食べました」

マレーネ「荒城の月は、音の泉の方のコンサートで、じっくり聞いていたくとして、豊太閤は、豊臣秀吉を湛えたってことだけ知ってればいいから、箱根八里、聞いてみましょう」

男性合唱 箱根八里

箱根の山は、天下の嶮(けん) 函谷關(かんこくかん) もものな

らず

萬丈(ばんじょう)の山、千仞(せんじん)の谷

前に聳(そび)え、後方(しりへ)にささふ 雲は山を巡り、霧

は谷を閉ざす

昼猶闇(ひるなほくら) き杉の並木

羊腸(ようちよう)の小徑(しょうけい)は苔(こけ)滑(す)らか

一夫關(いつふかん)に当(あた)るや、萬夫(まんぷ)も開(ひら)けな 天下(てんか)に旅(りょ)する剛氣(こうき)の武士

(もののふ)

大刀腰(たてわし)に足駄(あしだ)がけ 八里(はちり)の暑根(しよこん) いはね 踏みならず、かくこそ

ありしか、往時(わうじ)の武士

箱根(はこね)の山は天下(てんか)の岨(し) 蜀(しやく)の棧道(せきだう)數(かず)ならず 萬丈(ばんじょう)の山、千仞(せんじん)の谷

前に聳(そび)え、後方(しりへ)にささふ 雲(う)は山(やま)を巡(めぐ)り、霧(きり)は谷(や)を閉(と)ざす

昼猶闇(ひるなほくら) き杉(きすぎ)の並木(なみぎ) 羊腸(ようちよう)の小徑(しょうけい)は、苔(こけ)滑(す)らか

一夫關(いつふかん)にあたるや、萬夫(まんぷ)も開(ひら)けな 山野(さんや)に狩(かり)する剛毅(こうぎ)のます

ら(益(えき)荒(わ)男(お) 獵銃(りやくじゆう)肩(かた)に草鞋(くさしや) (わらぢ) がけ 八里(はちり)の暑根(しよこん)踏み破(やぶ)

る かくこそあるなれ、当時のますらを

マレーネ「元氣な曲ね」

廉太郎「発表演奏会の時も、人気がありました」

マレーネ「そして、童謡集も作ってた」

廉太郎「鈴木君が卒業して、宮崎の師範学校に行ってしまったから、最後は、帝大の巖谷君、くめ先輩と三人で仕上げました」

マレーネ「全20曲のうち、3曲が鈴木君で、16曲があなたの作品ね。編曲も一曲あるわね。「本書載する所の歌曲のテーマは、児童が日常見聞する風物童話等に取り、主として四季の順序に配列したれば、教師は其期節の折々に応じて適当なるものを選び先づ談話問答等に由りて、児童の興味を喚起せしめ、然る後、一句づつ、口授するを宜しとす」って、言文一致を目指した割には硬いわね」

廉太郎「これは先生向けの文書ですから」

マレーネ「季節の季が期末テストの期になってるけど」

廉太郎「すみません」

マレーネ「速度は、決して緩慢に流れるべからず、唱歌の方法は活発なるべし！いいわ、みんなで歌ってみようじゃない」

廉太郎「今ですか？」

マレーネ「東くめ作家、今で言う作詞ね。瀧廉太郎作曲 お正月。さあ皆さん立つて下さい。歌詞はスクリーンにですよ。カラ

オケの要領でね」

ピアノの伴奏に合わせて、皆で歌う

♪もういくつねるとお正月 お正月には 凧あげて こまをまわして 遊びましょう はやくこいこいお正月。

もういくつ寝るとお正月 お正月には まりついて おいばねついで遊びましょう はやくこいこいお正月

マレーネ「ご協力ありがとうございました！まあ、もう三が日過ぎてるけどね。これを完成させて、ドイツへ旅立ったわけだ」

廉太郎「送別会も開いていただきました」

マレーネ「環ちゃんもピアノ弾いたのよね」

廉太郎「もうよして下さいよ」

マレーネ「最後は自分でも演奏したんでしょ」

廉太郎「はい」

ベートーヴェン 月光 ピアノ独奏

スクリーンに廉太郎のドイツへの行程が示される。

18 ベルリン 幸田幸の下宿 1901年 5月

長椅子にかけた廉太郎にお茶を入れる幸。

幸「ようこそ、ベルリンへ」

廉太郎「やつと来ました」

幸「あなたのおかげで、姉さんと私はとんだ悪者扱い」

廉太郎「その話は、もう…」

幸「ごめんなさい。でもあなたは、新世紀になってからの希望の星だから」

廉太郎「20世紀になったんですね。僕にはあまり実感がないんですけど」

幸「明治34年の方がしっくりくる？」

廉太郎「21になりました」

幸「入学してから7年になるのね。学校はどう？」

廉太郎「相変わらずです。延先生は厳しいし」

幸「あら、自転車美人のこと聞してるわよ」

廉太郎「よして下さいよ。何でもないんですから」

幸 「いきなり結婚を申し込んだんですって？」

廉太郎 「そんなことしてません」

幸 「瀧先生は、環ちゃんにぞっこんだつてもつぱらの噂らしいわよ」

廉太郎 「幸さんこそ、どうなんです。順番からいえば、そちらが先でしょ」

幸 「そんな暇なんて少しもないわよ。レッスンプけで、帰つたらばったり」

廉太郎 「厳しいんだ」

幸 「そうだ、廉太郎君、ライブツイッヒに着いたら手紙をくれな  
い？」

廉太郎 「手紙…ですか？」

幸 「そう文通するの。但しドイツ語でね」

廉太郎 「なるほど、ドイツ語の勉強だ」

幸 「そう、あなたの受験にも役立つでしょ」

廉太郎 「わかりました。必ず書きます」

マレーネ 「久しぶりの再会の癖に、文通だけ？」

廉太郎 「いけませんか？」

マレーネ 「澤井信一郎さんの映画では、幸さんという仲になつたわよ」

廉太郎 「確かに幸さんとは仲はよかったけど。いいですか、僕は文部省から公費で派遣された留学生なんです。王立音楽院の試験もあるし、恋愛に割いている時間なんかありませんよ」

マレーネ 「受験したんだ」

廉太郎 「そうです。ピアノは多少自身がありました、作曲の方

は、四季とメヌエットだけですし、なにもかもドイツ語ですから」

マレーネ 「ベルリンにはどれくらいいたの？」

廉太郎 「20日程です。童謡集でお世話になつた巖谷君がいて、いろいろ見学することもできました」

マレーネ 「ライブツイッヒには汽車で」

廉太郎 「そうです。朝出て、その日の内につきました。バッハが教会の音楽監督になり、メンデルスゾーンやシューマンが活躍した音楽の聖地に到着したんです」

19 ドイツ王立音楽院 ライプツイッヒ 1901年10月

ピアノ独奏

ピアノに向かつている廉太郎のところへタイヒミューラー（38歳）がやってくる。

タイヒミューラー 「合格おめでとう」

廉太郎 「ありがとうございます。タイヒミューラー先生、先生のおかげです」

タイヒミューラー 「君の実力が認められたんだ。ケーベル先生も喜んでいるだろう」

廉太郎 「手紙で知らせました。でも本番はこれからです」

タイヒミューラー 「その通り。どうだね我が校の講義は？」

廉太郎 「演奏に関しては厳しいです。でも理論のほうは、ヤードスゾーン先生の方が大変そうです」

教壇にヤードスゾーン（70歳）、神妙に耳を傾ける学生たち。  
ヤードスゾーン 「フガートとは何かなミューラー君」

ミューラー「フーガンの提示部やストレッタなどの様式・技法を用いて作曲されていますが、その要件をすべて満たしているわけではなく、独立した曲でもないものです」

ヤーダスゾーン「次、ベートーヴェンがフガートを使用したのは？」

学生1「確か…」

ヤーダスゾーン「アウト！帰ってください。次」

学生1退場

学生2「最後の5つのピアノソナタです」

ヤーダスゾーン「ではその完成形を示す作品は？」

学生3「第九です」

ヤーダスゾーン「セーフ！次、ザルリーノが挙げている対位法の説明は音程、規則と禁則、模倣や二重対位法とあと一つは？」

学生4「えーっと定…」

ヤーダスゾーン「アウト！帰って！次！」

学生5「定旋律書法です」

ヤーダスゾーン「その「調和教程」をドイツに紹介したのは？」

学生5「確か北ドイツオルガン音楽に…」

ヤーダ「スヴェーリングだ！アウト！3アウトチェンジ！さて今日は何人この教室に残れるかな」

暗転

暗転

タイヒミューラー「演奏に専念していた学生は座学が苦手な者が多いからな」

廉太郎「日本では全員必修でしたが」

タイヒミューラー「学ぶことは重要かもしれない。でもそれだけで、よいわけでもない。楽譜通りに演奏するだけではね」

廉太郎「でも作曲には必要不可欠ですよ」

タイヒミューラー「勿論だ。でも作曲家と演奏家は楽譜だけで会話をするわけじゃないだろ」

廉太郎「感性ですか？」

タイヒミューラー「どんな名曲が楽譜に書かれたとしても、それを演奏する者が誰もいなくては、音楽にはならない。曲を作る」とへと、演奏することへのアプローチは、若干異なる。でもどちらがなくても駄目なんだ」

廉太郎「僕の演奏は…」

タイヒミューラー「少し、頭が勝ってるな。作曲家的なアプローチだ」

廉太郎「そうなんです」

タイヒミューラー「嬉しいのかい？」

廉太郎「ずっと気になってたんです。自分の曲を弾くように他の人の曲が演奏できないことを」

タイヒミューラー「！」

暗転

20 廉太郎の下宿 フェルディナンド・ローデ通り七番

1年11月 190

プロエバウムにお茶を注ぐ廉太郎。

廉太郎「君のおかげでドイツ語にも自信がついてきた。本当にありがとう」

暗転

20 廉太郎の下宿 フェルディナンド・ローデ通り七番

1年11月 190

プロエバウムにお茶を注ぐ廉太郎。

廉太郎「君のおかげでドイツ語にも自信がついてきた。本当にありがとう」

暗転

20 廉太郎の下宿 フェルディナンド・ローデ通り七番

1年11月 190

プロエバウムにお茶を注ぐ廉太郎。

廉太郎「君のおかげでドイツ語にも自信がついてきた。本当にありがとう」

暗転

20 廉太郎の下宿 フェルディナンド・ローデ通り七番

1年11月 190

プロエバウムにお茶を注ぐ廉太郎。

廉太郎「君のおかげでドイツ語にも自信がついてきた。本当にありがとう」



プロエバウム「あなたにドイツ語を教えられる人は、このライブツイツヒに大勢いるけど、私に日本のことを教えられるのはあなただけ。だから、お礼を言うのは私の方だわ」

廉太郎「日本人であることに感謝しないと」

プロエバウム「そうよ。西洋列強の苛烈な植民地政策を巧みにかわした奇跡の国なんですから」

廉太郎「ヨーロッパの歴史を勉強すると、250年も平和を続けた江戸時代に育まれた独自の文化の素晴らしさを改めて感じるんだ」

プロエバウム「江戸末期に日本を訪れたヨーロッパ人がとても驚いたのは、貧しさに反比例する高潔さだったそうよ」

廉太郎「高潔さ？」

プロエバウム「貧しさといってもそれは、西洋文明から見てもものだったと思うけど、多くの欧米人が日本人の自信に満ちたプライドと礼儀正しさを、好奇心に感心してたみたい」

廉太郎「君はどうなの」

プロエバウム「本で読んだことしかない国の人が、目の前に現われて、それがとても魅力的な青年だったから…」

廉太郎「！」

二人の唇が自然に触れ合って…。

暗転。

## 21 ライプツィツヒ歌劇場 1901年11月25日

ビゼーのカルメン カルメンのアリアの後、暗転して最終場面復縁しなければ殺すと脅すドン・ホセに対して、カルメンはそれ

ならば殺すがいいと言い放ち、逆上したドン・ホセがカルメンを刺し殺す。

## 22 フェルデナンド・ローデ通り七番

読書をしていたプロエバウムのところへ廉太郎が帰ってくる。

プロエバウム「お帰りなさい」

廉太郎「君は日本人の素晴らしさを教えてくれたね」

プロエバウム「廉太郎、あなたの顔色が悪いわ」

廉太郎「僕は、今夜、西洋音楽の偉大さに打ちのめされた」

プロエバウム、倒れそうな廉太郎を支え、

プロエバウム「すごい熱よ！」

廉太郎「僕は、今音楽につつまれてる。幸せなんだ」

倒れる廉太郎。

プロエバウム「廉太郎！」

暗転

## 23 聖ヤコブ病院 1902年3月

待合室で待っている幸の所へ巖谷小波（31）がやってくる。

幸「巖谷さん、先生はなんて？」

巖谷「このままこちらにいても復学は難しいそうだ」

幸「そんなに…」

巖谷「今は日本までの長旅にも耐えられないだろうって」

幸「あんなに勉強したがってるのに…」

巖谷「その真面目さが婀娜になったんだ」

幸「いつ帰れるの」

巖谷「夏になれば」

幸「1年間で、音楽院に通えたのはたった二か月」

巖谷「あとは天井のしみを眺めて過ごしたんだ」

幸「神様は残酷だわ」

巖谷「日本に帰れば、きっと元気になるさ」

暗転

24 若狭丸 船上 ロンドン湊 1902年8月29日

廉太郎と土井晩翠（30歳）がデッキに腰掛けている。

廉太郎「ロンドンで土井先生にお会いできるなんて、思いもしませんでした」

土井「君との合作がベテルブルグで披露されたのを知ってるかね？」

廉太郎「ロシアで？」

土井「竹田出身の広瀬君が、楽譜を持っていてね。ロシア人がピアノで弾いたそうなんだ」

荒城の月、ピアノ独奏 伴奏なしのメロディのみ

土井「たいへんな評判だったそうだよ」

廉太郎「先生のおかげです」

土井「ピアノの演奏だから歌詞は関係ないだろう」

廉太郎「いえ、先生の詩があったからできた曲です」

土井「そう言ってもらえると正直うれしいが、ロシア人に聞こえた

のはメロディだけだからな」

廉太郎「評価を受けたのなら、先生のテーマは必ず伝わっています。これからも日本語の素晴らしさを伝えてください」

土井「君もまだ22だろう、一緒に日本文化を広めようじゃないか」

廉太郎「はい」

暗転

廉太郎「それから1ヶ月後、僕は日本に帰ってきた」

マレーネ「出発の時とは打って変わった寂しい出迎えだったわね」

廉太郎「ろくな勉強もせず、一年以上も無駄に過ごしたんですから当然の報いです。でも大吉兄さんや、タミさん、節次郎が来てくれて、本当にうれしかった」

マレーネ「帰ってからも静養中にまず二曲仕上げてるわね」

「別れのうた」が流れてくる

なごりをおしむ ことの葉も いまはのべえで ただつらし

あすはうつつ きょうはゆめ きょうはゆめ

のこるおもいを いかにせん ああいかにせん

マレーネ「あはれいかにか 思ひせまりて いつこのはてに 急ぎ

ゆくらむ」

廉太郎「水のゆくえ…ですわね」

マレーネ「そして追い討ちをかけるように最愛の人を失ったのね」

1902年11月23日 瀧大吉 没 享年40

廉太郎「大吉兄さんが死んでしまうなんて、まだこれからだったんです」

マレーネ「あなたの悲しみようとでも葬儀には出席させられない  
と思ったタミさんは翌日、あなたを大分に送り出した」

廉太郎「母さんが優しく迎えてくれました」

マレーネ「それからまた2曲仕上げてる」

廉太郎「作曲してる時は幸せだった」

マレーネ「そして、1903年6月29日午後5時、あなたは、肺

結核で物理的な死を迎える」

廉太郎「それで、ここへ。僕はこれからどうなるんです？」

マレーネ「生き続けるわ」

廉太郎「助かるんですか？」

マレーネ「生き返るわけじゃないの」

廉太郎「？」

マレーネ「物理的な肉体は消滅しても、あなたはあなたの作品の中に  
生き続けるの」

廉太郎「作品の中で？」

マレーネ「ここはどこだったかしら」

廉太郎「時も空間も飛び越えた世界？」

マレーネ「いいえ、大分市に昨年オープンしたばかりのホルトホー

ル大分、平成26年、2014年が明けたばかり」

廉太郎「僕が死んでから、112年も経ってる」

マレーネ「だからあなたは生き続けているの。ほらあなたの最後のピ

アノ曲が112年経っても大切に演奏されてる」

廉太郎「！」

「憾み」ピアノ独奏

スクリーンに全作品名が流れて 幕

#### 参考文献

松本 正著 大分県先哲叢書 滝廉太郎

海老沢 敏著 滝廉太郎―夭折の響き 岩波新書

財津 定行著

嗚呼！滝廉太郎―知られざるその家族とふる里

日本文学館

小長 久子著 滝廉太郎（人物叢書）

楠木しげお著 滝廉太郎ものがたり

郷原 宏著 わが愛の譜（うた）滝廉太郎物語（新潮文庫）

監督 澤井信一郎 わが愛の譜 滝廉太郎物語〔DVD〕

wikipedia:関連項目